

鵜飼

江波左衛門作

前

ワキ 旅僧

ワキヅレ 従伴僧

シテ 鵜つかひの翁

後

シテ 閻魔王

地は 甲斐

季は 夏

ワキ詞

「是は安房の清澄より出でたる僧にて候。我いまだ
甲斐の国を見ず候ふ程に。此度甲斐の国行脚と志
して候。

サシ

「行末いつと白波の。安房の清澄立ちいでゝ。六浦の
わたり鎌倉山。

歌

「やつれはてぬる旅姿。く。捨つる身なれば恥ぢ
られず。一夜仮寐の草薙。鐘を枕の上に聞く。都
留の郡の朝立つも。日たけて越ゆる山道を。過ぎ

て石和に着きにけり。く。

シテ一声

「鵜舟に灯す篝火の。後の闇路を如何にせん。

シテサシ

「実にや世の中を。うしと思はゞ捨つべきに。其心
更に夏河に。鵜使ふ事のおもしろさに。殺生をす
るはかなさよ。

詞

「伝へ聞く遊子伯陽は。月に誓つて契りをなし。夫
婦二つの星となる。今の雲の上人も。月なき夜半
をこそ悲しみ給ふに。我はそれには引きかへ。月

の夜頃をいとひ。闇になる夜をよろこべば。

下歌

「鵜舟に灯す篝火の。消えて闇こそ悲しけれ。

上歌

「つたなかりける身の業と。く。今は先非を悔ゆ

れども。かひも波間に鵜舟漕ぐ。是程惜しめど

も。叶はぬ命つがんとて。いとなむ業の物うさよ。

く。

シテ詞

「いつもの如く御堂に上り鵜を休めうずるにて候。

や。是は往来の人の御入り候ふよ。

ワキ詞

「さん候往来の僧にて候ふが。里にて宿を借り候へ

ば。禁制の由申し候ふ程に。さて此御堂に泊りて

候。

シテ

「実にく里にて御宿参らせうずる者は覚えず候。

ワキ

「さて御身は如何なる人にて渡り候ぞ。

シテ

「さん候是は鵜使にて候ふが。いつも月の程は此御

堂に休らひ。月入りて鵜を使ひ候。

ワキ

「さては苦しからぬ人にて候ふぞや。見申せば早拔

群に年たけ給ひて候ふが。かゝる殺生の業勿体なく候。あはれ此業を御とまりあつて。余の業にて身命を御つぎ候へかし。

シテ「仰せ尤にて候へども。若年より此業にて身命を助かり候ふ程に。今更止まつべうもなく候。

ワキヅレ「如何に申し候。此人を見て思ひ出だしたる事の候。此二三箇年先に。此河下岩落と申す所を通り候ひしに。かやうの鵜使に行き逢ひ候ふ程に。科の中

の殺生の由を申して候へば。実にもとや思ひけん。我屋に連れて帰り。一夜けしからず撰して候ひしよ。

シテ「さては其時の御僧にて渡り候ふか。

ワキヅレ「さん候其時の僧にて候。

シテ「なふ其鵜使こそ空しくなりて候へ。

ワキ「それは何故空しくなりて候ふぞ。

シテ「恥かしながら此業にて空しくなりて候。其時の有

様語つて聞かせ申し候ふべし。跡を弔うて御やり候へ。

ワキ「心得申し候。

シテ「抑此石和川と申すは。上下三里が間は堅く殺生禁断の所なり。今おほせ候ふ岩落辺に鶇つかひは多し。夜なく此所に忍び上つて鶇を使ふ。悪き者のしわざかな。彼を見顕はさんとたくみに。それをば夢にも知らずして。又或る夜忍び上つて鶇

を使ふ。ねらふ人々ばつとより。一殺多生の理にまかせ。彼を殺せと言ひあへり。其時左右の手を合はせ。かゝる殺生禁断の所とも知らず候。向後の事をこそ心得候ふべけれとて。手を合はせ歎き悲しめども。助くる人も波の底に。ふしづけにし給へば。叫べど声が出でばこそ。

詞

「其鶇使の亡者にて候。

ワキ詞

「言語道断の事にて候。さらば罪障懺悔に。業力の

鵜を使うて御見せ候へ。跡をば懇に弔ひ申し候ふべし。

シテ「あら有難や候さらば業力の鵜を使うて御目にかけて候ふべし。跡を弔うて賜はり候へ。

ワキ「心得申し候。

シテ「既に此夜も更け過ぎて。鵜使ふ頃にも為りしかば。いざ業力の鵜を使はん。

ワキ「是は他国の物語。死したる人の業により。かく苦

しみの憂き業を。今見る事の不思議さよ。

シテ「しめる松明ふり立てゝ。

ワキ「藤の衣の玉だすき。

シテ「鵜籠を開き取り出だし。

ワキ「島つ巢おろし荒鵜ども。

シテ「此河波にばつと放せば。

地「おもしろの有様や。底にも見ゆる篝火に。驚く魚を追ひまはし。かづき上げすくひあげ。隙なく魚

を食ふ時は。罪も報いも後の世も。忘れはてゝおもしろや。漲る水の淀ならば。生簀の鯉やのぼらん。玉島川にあらねども。小鮎さばしるせゝらぎに。かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の。燃えても影の暗くなるは。思ひ出でたり。月になりぬる悲しさよ。鵜舟のかゝり影消えて。闇路に帰る此身の。名残をしさを如何にせん。く。(中入)

「河瀬の石を拾ひ上げ。く。妙なる法の御経を。

一石に一字書きつけて。波間に沈め弔はゞ。などかは浮まざるべき。く。

「夫れ地獄遠きにあらず。眼前の境界。悪鬼外になし。抑彼者。若年の昔より。江河に漁つて其罪おびたゝし。されば鉄札数を尽し。金紙をよごす事もなく。無間の底に墮罪すべかつしを。一僧一宿の功力に引かれ。急ぎ仏所に送らんと。悪鬼心を和らげて。鵜舟を弘誓の船に為し。法華の御法の助

舟。篝火も浮ぶけしきかな。

地 「迷ひの多き浮雲も。

シテ 「実相の風あらく吹いて。

地 「千里が外も雲はれて。真如の月や出でぬらん。

ロンギ地

「有難の御事や。那落に沈む悪人を。仏所に送り給ふなる。其瑞相のあらたさよ。

シテ

「法華は利益深き故。魔道に沈む群類を。救はん為めに来りたり。

地 「実に有難き誓ひかな。妙の一字はさて如何に。

シテ

「それは褒美の言葉にて。妙なる法と説かれたり。

地

「経とはなどや名づくらん。

シテ

「夫れ聖教の都名にて。

地

「二つもなく。

シテ

「三つもなく。

地

「唯一乗の徳によりて。那落に沈みはてゝ。浮びがたき悪人の。仏果を得ん事は。此経の力ならずや。

地「是を見彼を聞く時は。く。たとひ悪人なりとて
も。慈悲の心を先として。僧会を供養するならば。
其結縁に引かれつゝ。仏果菩提に至るべし。実に
往來の利益こそ。他を助くべき力なれ。く。」

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第四輯』大和田建樹 著